

川越ミュージアムロードWeプロジェクト

2011年10月29日／11月7日～22日／11月12日、19日 川越市立美術館・川越市内

江戸情緒を今に伝える川越は、観光地として多くの人が訪れる魅力ある場所。〈川越ミュージアムロードWeプロジェクト〉は観光の中心である蔵造りのまち並みと、芸術と歴史の発信地である美術館・博物館とをつなげて賑わいを創生するとともに、アートを媒介としたさまざまな出会いと交流を広げようとするものです。プロジェクトの舞台は、蔵造り通りにある札の辻交差点から美術館までをつなぐ東西の道。ここを「ミュージアムロードWe」として、地元の小・中学生が制作したアートフラッグを街路灯に華やかに設置して人びとを誘いました。また期間中、アートガイドナビゲーターとスポットを巡るツアーを開催しました。

ワークショップ「アートフラッグをつくろう」

10月29日

講師に美術家の木谷安憲さんを迎え、川越のシンボル「時の鐘」のシルエットをベースに思い思いのフラッグを制作。生地は防水のターポリン、絵の具は耐水性のものを使用して、川越のイメージを自由に楽しく描き、明るく



個性的なフラッグ42枚を完成させました。
(参加者：42名[午前23名、午後19名])

ミュージアムロードを彩るアートフラッグでWe!

展示期間：11月7日～11月22日



ワークショップで制作したフラッグを、札の辻から美術館までの街路灯に設置。ここでは川越市元町商店会に協力いただき、商店会の旗を外してアートフラッグを展示しました。フラッグはまちのイメージを一新し、往来する人や市役所を訪れる人たちの目を楽しませました。また、商店会の人たちにも明るくなって良かったと好評をいただきました。まさにアートを身近に感じられるきっかけをつくったようでした。

まちアート発見！「いつの時代にも、現代のデザインの息吹を、現す・残す・伝える！」

11月12日、19日

蔵造りのまち並みを抜けた札の辻の交差点から東に歩くと、元町商店街を通り、美術館、博物館、川越城本丸御殿へとつづきます。「まちアート発見」ツアーでは、NPO法人アーバンデザイン研究体の加藤忠正さんの説明をうかがいながら、川越市立美術館をスタートに「ミュージアムロードWe」を楽しみ、歴

史的なまち並みへと歩きました。美術館のオープンスペースに置かれた彫刻たち、街灯のデザイン、バス停留所のデザイン、自動販売機の色と柄、ひさしの腕木の材質とデザイン、江戸・明治・大正時代それぞれの蔵造りのデザインの違いなどを見て歩くと、川越のまち中には、いつの時代にもその時どきのまちの人びとの「町並み」に対する意識の高さがうかがえるのでした。元気で明るい子供たちのアートフラッグは、そんな「歴史」を「今」へとつなげてくれたように感じました。

今回の〈川越ミュージアムロードWeプロジェクト〉では、アート(作品、美術館、さまざまな人びとが引き起こす現象)がまちに出ていくことで市民の関心を生み、アートの裾野を広げていこうと取り組みました。まち行く人がアートフラッグを見上げながら会話したり、思わず表情を和らげたりしながら美術と出会う様子はとても価値あるものでした。アートをベースにさまざまな人や資源、文化が繋がっていくことで、今後、川越のアートプラットフォームがしっかりと形成されていくことを目指していきたいと思っています。(参加者：18名)

田中晃(SMF運営委員)



Art音(on)! でつながろう

2011年11月19日 うらわ美術館



うらわ美術館の秋の催しとして定着しつつある〈多世代交流ワークショップ〉も3年目になります。今年は、「音」を視覚化していくことによって、それぞれの感じ方や表現の違いを多世代で感じ取り、そこから生まれるコミュニケーションを大切につなごうとしました。

まずは身近な生活音(料理をする音、まちの音、駅の音)を聞いて、何の音か当てたり、その音はどんな感じがするかを話し合ったりしました。次に、講師の小池ちかこさん(臨床美術士)が出す音を聴いて、そのイメージを画用紙に鉛筆で描きました。はじめはとまどっていた参加者も、徐々に線描による抽象表現に抵抗がなくなり、ペアで取り組む頃には体でリズムを取りながら伸びのびと描いている姿も見られました。音を描くことに慣れてきた頃を見計らい、A5判程度の白い石膏ボードを2枚つないだものが、それぞれのペアに配られました。用意された身近な品(すりこぎ、紙コップ、



なわとび、金属製のボウルなど)でさまざまな音を出し合い、その感じを「音の痕跡」として石膏ボードの表面に五寸釘で描いて(削って)いきました。線描、点描、深く削る、浅く削る、穴をあける……。十人十色の音の表現が進出していき、やがて互いの表現は一つになっていきました。

石膏ボードの表面がさまざまな線で埋められ、活動は次の段階へ。透明水彩絵の具を使い、「音を描く」体験です。音を聴き、平筆、中筆、面相筆を使い分けて、そのイメージを着色していきました。原色のままでも白いボードにはよく映え、吸い込みも早いので重色もきれいに塗ることが出来ます。着色した上に削り



出した石膏の粉をまぶしてパステルカラーにしたり、筆を使わず手に絵の具を付けて手形を押したりする子どもたちの姿もありました。自分の色の上にペアの色が重なったり、相手の線の上に自分の色が入り込んだりと、次つぎと姿を変えていく作品に夢中になって向き合っていました。2枚のボードはもはや別々のものではなく、色と形のハーモニーを奏でる一つの作品となりました。

最後に、それまでつながっていたボードを二つに分けて展示し、全員で作品を鑑賞しました。名残惜しげにペアの作品とつなげてみる人、他の人の作品と似た色味を見つけてつなげてみる人など、一人ひとりの満足そうな笑顔が印象的な鑑賞タイムでした。持ち帰った作品は、自分のペアだった方やその作品、また共に活動した方がたを思い出させる素敵なおみやげになったことでしょう。

田島均(SMF運

